

都市形成過程と地域イメージからみる 盛岡市中心市街地の地域らしさ

萩原 隆太¹・福島 秀哉²・福井 恒明³

¹学生会員 法政大学大学院修士課程 デザイン工学研究科 都市環境デザイン工学専攻
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:ryuta.hagiwara.9x@stu.hosei.ac.jp)

²正会員 博士(工) 株式会社上条・福島都市設計事務所
(〒162-0065 東京都新宿区住吉町10-5, E-mail:fukushima@kfa.co.jp)

³正会員 博士(工) 法政大学教授 デザイン工学部 都市環境デザイン工学科
(〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1, E-mail:fukui@hosei.ac.jp)

近年、固有性や多様性を生かした地域づくりが求められてきている。この固有性や多様性を説明する言葉として「地域らしさ」がある。本研究で対象とする盛岡市中心市街地は、近世城下町を基盤とする都市であり、現在既成市街地の更新が課題となっている。課題解決に向けて「地域らしさ」を軸とした再整備が希求されているが、この盛岡の「地域らしさ」は市民に共有できる形で示されていない。そこで本研究では、都市形成過程と現代の空間的特徴、および地域イメージとの関係性を明らかにすることを目的とする。文献調査とアンケート調査から、地域イメージの境界部分が自然地形と重なる傾向があることを明らかにし、盛岡市の空間的特徴として、都市機能が明確な面的エリアと、商業機能や滞留機能を有する場所が点的に存在するエリアとが、混在していることが挙げられると指摘した。

キーワード: 盛岡市中心市街地, 地域らしさ (Local Identity), 都市形成, 地域イメージ

1. はじめに

(1) 研究背景

近年、地域の固有性・多様性を生かした地域づくりが求められてきている。国土のグランドデザイン2050¹⁾では、「各地域が主体性を確立し、固有性を深め、多様性を再構築すること」が理念の一つとして掲げられている。この固有性や多様性を説明する言葉として「地域らしさ」がある。地域らしさは、「場所のアイデンティティ」に関連したキーワードであり、その地域がどのようなアイデンティティを有しているのかを地域住民の暮らしや地域イメージと結びつけて論じられてきた。木下ら²⁾はこれを「ローカル・アイデンティティ」として論じている。ローカル・アイデンティティは、「その場所の個性と他の場所との区別を与えるとともに、区別可能な実態としてそれを認識するための基礎として役立つもの」と表現されている。その内容は「物理的な構造 (physical makeup)」を強調するケースから、「社会的な活動 (social activities)」を強調するケースまで多岐に渡る³⁾。特に物理的な構造に着目した際には、歴史的な街並みや自然観に対して「地域らしさ」が論じられることが多いが、雑然とした街並みが地域の特色とし

て認定されることもある。

歴史的な街並みを有する都市の代表例に、近世城下町を基盤とする都市が挙げられる。近世城下町都市から近代都市への変化は、日本の都市形成の一つのパターンである。近世期の城下町は、自然風土との応答や周辺のランドマークへの眺望など、各都市固有の計画意図により、多様な形態が生み出された⁴⁾。その後の各都市形成は、この近世期の基本的な都市骨格を維持し、その基盤に規定されながら、街路整備や都市計画事業により新しい骨格を重ねていく形で進められた⁵⁾。近世城下町を基盤とする都市の地域らしさの物理的な構造の把握に向けては、この整備年代の違いによる空間的特徴と、形成過程を丁寧に読み解くことが重要である。

本研究で対象とする盛岡市の中心市街地は、盛岡城とその城下町を基盤とする地方都市である。現在官公庁施設の老朽化や商業面で更なる魅力創出が課題となっている⁶⁾。その課題解決に向けた事業では盛岡の「地域らしさ」を軸とした再整備が希求されているが、盛岡の「地域らしさ」の物理的な構造や、それに起因する地域イメージについて、地域住民と共有できる形で示されていない。その要因の一つとして、盛岡の都市形成過程に着目すると、都市

形成の時期の差異により各エリアが独自のまとまりを持って形成されており⁷⁾、地域内に異なる複数の地域イメージが存在することが考えられる。盛岡市中心市街地を対象として、その都市形成過程と地域イメージの関係を明らかにし、地域らしさについて考察することは、地域の文脈を適切に読み解くことが求められる今後のまちづくりにおいて重要な知見になると考える。

(2) 既往研究と研究の位置づけ

a) 城下町を基盤とした地方都市に関する研究

城下町を基盤とした地方都市に関する研究のうち、都市構造に着目した研究には、中心市街地における都市構造の実態を官公庁施設・鉄道駅・それらと城郭の位置関係から明らかにした研究⁸⁾や、近世以降の水空間の変遷を明らかにした研究⁹⁾がある。都市構造に加えて、近代以降の都市形成過程と人口変動に着目し、その関係性を明らかにした研究¹⁰⁾や、地価データを用いて中心市街地の賑やかさとその要因を明らかにした研究¹¹⁾も見られる。既往の知見から、近代以降の都市整備が歴史的な都市構造を際立たせるように行われてきたことが明らかとなり、既成市街地部に歴史的ネットワークを絡ませる必要があると指摘されている。

b) 地域イメージと地域らしさに関する研究

都市空間に対する地域住民の地域イメージと認知構造に着目した研究には、地域イメージを対象地域の構成要素から追い、その認知構造を明らかにした研究¹²⁾や、地方都市の評価構造を地域イメージの構成要素から明らかにした研究¹³⁾がある。これらの研究を通し、構成要素の中でも特に意識にのぼりやすいものがあると明らかになった一方で、その構造は地域独自の形態で複雑に絡み合っていると指摘されている。

また、地域イメージを空間上に可視化した研究には、対象地への来街者の行動圏域や選好理由に着目し、経験と地域イメージとの関係を明らかにした研究¹⁴⁾や、地域への愛着について「大切な場所」から、地域イメージやアイデンティティを明らかにした研究¹⁵⁾など蓄積がある。そして、地域への愛着や選好と個人の経験や行動には関係があるとされ、これらは地域イメージに影響を及ぼすことが明らかとなっている。

c) 本研究の位置づけ

既往研究では、歴史ある都市の都市形成の特徴や、地域住民が抱く自然観から、地域ならではの特色を見出せることが明らかになっている。しかし、自然地形の影響を含む、これまでの都市形成過程で形作られた都市骨格と、地域住民が抱く地域イメージとの関係性については明らかになっていない。特に本研究の対象地である盛岡市は、城下町を基盤とした都市であるとともに、都市形成の特徴から地域内に複数の異なる地域イメージが存在すると考

えられる。よって本研究では、物理的構造である都市骨格に着目し、その形成過程と地域イメージの関係性を取り上げる点で新規性があると考え、これらを空間上に可視化することを課題とする。

(3) 研究目的

盛岡市中心市街地における都市形成過程と現代の空間的特徴、および地域イメージとの関係性を明らかにすることを本研究の目的とする。

(4) 研究方法

まず、文献・地図資料調査から、盛岡市中心市街地の都市形成の過程を把握し、自然地形と照らし合わせて空間的特徴を分析する。また、盛岡市役所職員への地域イメージに関するアンケート調査から、エリアごとの地域イメージ範囲やその境界部分の空間的特徴を分析する。そして、これまでの都市整備状況と地域イメージを重ね合わせて、都市形成と地域イメージの関係性を分析・考察する。

2. 都市形成過程と空間的特徴

(1) 対象地の概要

盛岡市は岩手県の中央部に位置しており、中心市街地は北上川・中津川・雫石川の合流地点にある。盛岡城（現盛岡城跡公園）の築城された場所は花崗岩の丘陵地である一方で、その周囲は氾濫平野や旧河道となっており、3河川によって形成された河岸段丘上にある（図-1）。近世期に盛岡城が築城された際は、河川や周囲の山々といった自然地形を活かして城下町が形成された。その後、明治期以降の近代化において、人口拡大を前提とした軸上都市の都市計画によって南西方向に市街地が拡大した。現代では、コンパクト＋ネットワークの考えに基づいて、既成市街地の更新が検討されている¹⁶⁾。



図-1 盛岡市中心市街地と軸上都市（参考文献 17 に筆者加筆）

(2) 盛岡市中心新市街地の都市形成の過程

本節では、文献調査により盛岡市中心市街地の都市形成の過程を整理し、現代まで継承された都市骨格の形成時期を把握する。まず、調査に使用した主な文献資料を表-1に示す。

a) 近世期

盛岡の都市形成は、盛岡城の築城から始まる。盛岡城は、文禄元（1592）年に秀吉から盛岡城築城の許可を受け、寛永12（1635）年に築城され、その周囲に城下町が形成された（図-2）^{18）}。盛岡城の西に流れる北上川は内堀として機能していたが、大洪水のたびに被害が発生していたために、延宝元-3（1673-1675）年に北上川を直線にする流路変更工事が行われた^{19）}。

b) 明治から戦前期

明治から戦前までの主な都市整備事業を図-3に示す。明治期以降の大きな都市整備への動きは、明治22（1890）年の東北本線の開通に伴う盛岡駅の開業から始まる。当時、「鉄道の駅といったところで結局車よせの事だろう。車よせを作るのに天下の美田を潰すとはらちもないことだ。それは米も豆も採れない河原で結構だ」という理由から、既成市街地から北上川を挟んで離れた土地に鉄道駅が整備される。そのため、急遽開運橋が架橋され（明治22（1890）年）、官公庁街とを結ぶ大通りが形成された。これが盛岡の基本路線となった^{21）}。また国の直隸となった盛岡城は、失業者対策事業で工事に着手、明治39（1906）年に岩手公園（現盛岡城跡公園）として開園した^{22）}。

大通・菜園地区についてみていく。大通地区は、藩政期の北上川の河道変更によって生まれた広大な土地であり、大正末期に至っても大部分が田畑だった。一方の菜園地区は、明治32（1899）年に県立盛岡農学校を創立して、周辺が実習地として利用されていた。昭和2（1927）年、この土地の埋め立ておよび経営を行うため、南部土地株式会社が設立された。昭和3（1928）年から、両地区一体的に区画が定められ、商店街を発展させるとともに、周辺一体を住宅地として分譲された^{23）}。

c) 戦後期

戦後期の主な都市整備事業を図-4に示す。第二次世界大戦により盛岡駅前地区が空襲の被害を受け、戦災区域に指定される。その後、昭和21（1946）年に戦災復興区画整理事業が施工され、駅前地区の戦災復興が進んだ^{25）}。またこの当時、盛岡城跡公園に隣接した桜山神社は境内が更生市場となり、これが年々膨張して飽和状態に至ったため、引揚者対策の一環として政治的解決を迫られていた。そのため、昭和25（1950）年に中ノ橋大通線が事業認可され、昭和26（1951）年に棧橋式店舗（東大通商店街）の建設が可決された^{26）}。昭和29（1954）年度にこの中ノ橋大通線が全線開通することとなる。

内丸地区では、官公庁施設を計画的に集中する必要が

表-1 使用した主な文献資料

No.	著者：文献・資料名称	発行年
1	盛岡市史編纂委員会：盛岡市史 第三分冊一 近世期上	1956
2	細井計，伊藤専幸，菅野文夫，鈴木宏：岩手県の歴史	1999
3	森嘉兵衛：岩手近代百年史	1974
4	盛岡市庶務部企画調査課 東北開発研究所：盛岡の歩み 市制施行80周年記念	1970
5	独立行政法人都市再生機構 岩手・秋田開発事務所：盛南開発への道-盛岡新都市区画整理事業 事業誌-	2014



図-2 近世の盛岡城とその城下町（参考文献20に筆者加筆）



図-3 明治～戦前の主な都市整備事業（参考文献24に筆者加筆）

あるとして「一団地の官公庁施設計画」が策定され、計画決定され（昭和32（1957）年）、昭和44（1969）年までにほぼ完了した^{27）}。

1960年前後からは、街路整備が進み、土地区画整理や新設道路の整備や拡幅が行われた。仁王地区では、街路が旧城下町の形態であったため、幅員が狭小で不規則であり、建築物が稠密に乱立していた。これを受け、仁王地区都市区画整理事業が着工（昭和34（1959）年）され、昭和53（1978）年度に完成した^{28）}。さらに、盛岡バスセンターが昭和35（1960）に開業するとともに、中ノ橋通も昭和42（1967）年度までに完成し、都市間移動の拠点である盛岡駅から都市内移動の拠点である盛岡バスセンターとが1本の路線で繋がった^{29）}。大通商店街では、防災建築街区造成法の制定を受け、昭和44（1969）年に防災建築街

区造成事業が開始されている³⁰⁾。

その後、岩手国体の開催（昭和45（1970）年）や東北新幹線の開通（昭和57（1982）年）に向けて、既成市街地が更新された。盛岡駅前第一地区では、市街地再開発事業や商店街改造事業が実施され（昭和53（1978）年に都市計画手続き完了）、盛岡駅前北地区では、住宅地区改良事業と都市区画整理事業が実施された（昭和54（1979）年）。北上川沿川の木伏緑地は地下駐輪場として昭和57、58（1982、1983）年度に整備された³¹⁾。

(3) 街区形状と空間的特徴

本節では、都市整備を経て形成された街区形状の空間的特徴を分析する。盛岡市中心市街地の街区形状に着目すると、不整形な形をした街区が多く見られる。これは、近世期の「五の字型」の街路整備に起因している。①屈曲した街路、②T字路、③斜めに交差する街路の組み合わせによって構成された街路形態が特徴として挙げられる³²⁾。敵からの攻めに備えて見通しが悪くなるような街路配置がされるとともに、裏通りまで商いを可能とする構造を実現していた³⁴⁾。

また、この近世期の街区形状は自然地形によっても影響を受けている。北上川・中津川・雫石川の3河川の合流地点であることに加えて、盛岡城は花崗岩の微高地上に築城されている。このように、街区形状は近世期の街路整備の方針や自然地形の影響により不整形に形成され、それが現代まで部分的に継承されてきている。

不整形な街区のうち、最も古い測図（大正元（1912）年）

時点から現代までその街区形状が継承されてきた場所を図-5に示す。図-5より、近世期に城下町エリアであった地区を中心に現代まで不整形な街区が継承されていることがわかる。また、奥州街道や秋田街道は、中心市街地内で斜めに屈折しており街路であり、中津川や北上川に沿って走っている。こうした街道と河川地形に挟まれた街区は不整形になっている。さらに、付け替え前の旧北上川の流路と盛岡城が築かれた微高地に挟まれた街区（大通商店街の東端）にも不整形地が見られる。このように、後に面的な都市整備事業が行われたエリアでも、自然地形や旧街道によって形成された不整形街区が現代にも残されていると言える。

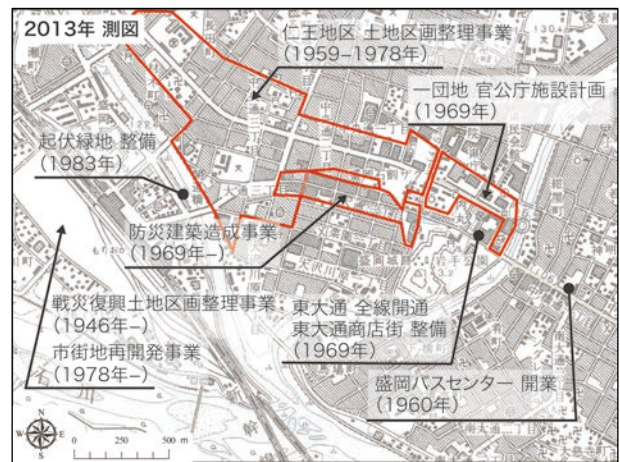


図-4 戦後期の主な都市整備事業（参考文献32に筆者加筆）

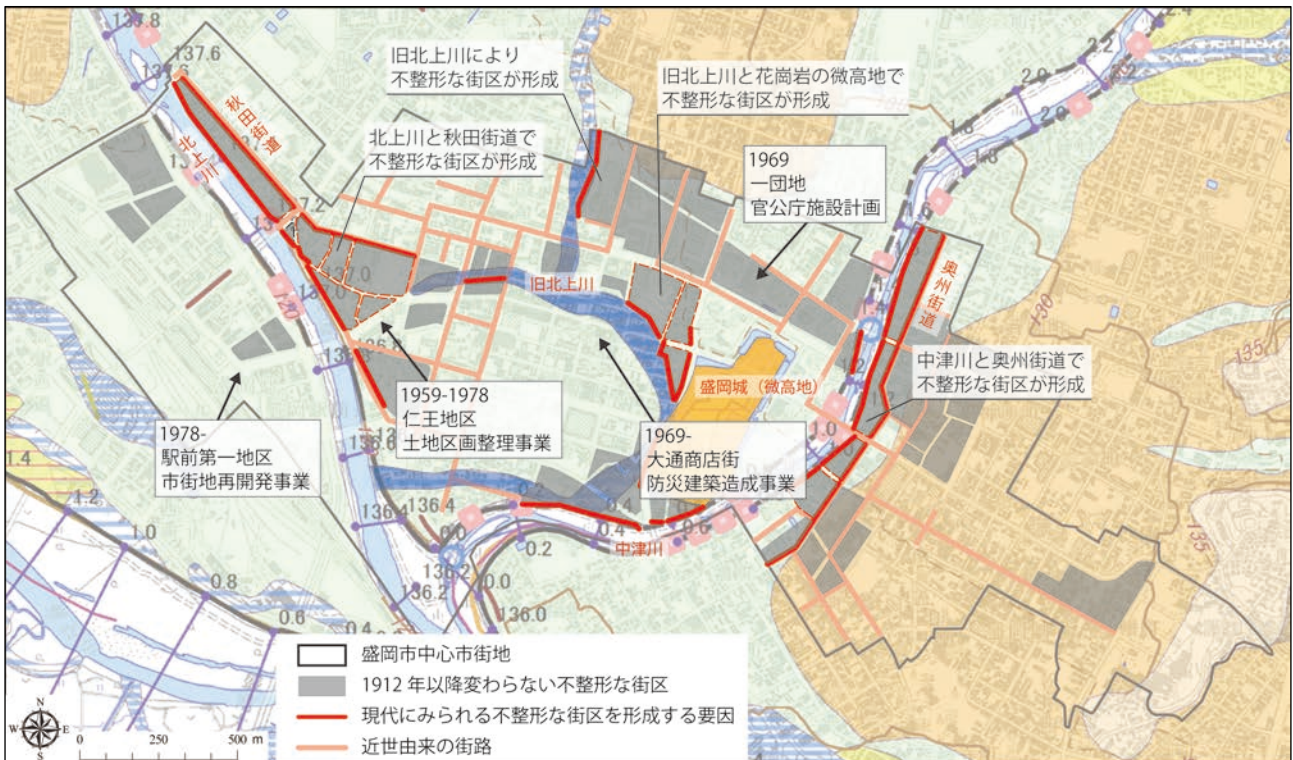


図-5 盛岡市中心市街地における不整形な街区形状と自然地形（治水地形分類図³⁵⁾に筆者加筆）

3. 地域イメージの空間的特徴

(1) アンケート調査概要

a) 調査方法

まずアンケート対象者は、地域の地理や歴史に対する理解ある点、調査を通して中心市街地に持たれる地域イメージの特徴を概観したい点から、盛岡市役所の職員を対象とした。調査手法として、盛岡市中心市街地における、地域イメージの範囲とその境界部分の特徴を把握するため、圏域図示法を用いた調査を行った。

b) 調査内容

以下の項目について調査を行った。

1. 属性
 2. 対象地での居住年数あるいは来街頻度
 3. 対象地内を地域イメージ毎に分節し、その場所の特徴から名前をつける
 4. 3の理由
 5. 対象地内で周囲と比べ雰囲気が変わったと感じる場所をプロットする
 6. 5の理由 (1・2は選択式質問, 3～6は自由回答式質問)
- 以上の概要で調査を行い有効回答数 14 サンプルを得た。

(2) 地域イメージとその境界部分の空間的特徴

アンケート対象者の属性と対象地での居住の有無・来街頻度についてのアンケート結果を表-2に示す。男性が全体の71% (10名) と多くなっているが、年齢層は20代から50代まで均等に分散している。居住地の傾向として、盛岡市内の在住が76%と多く、中心市街地へは1週間に1回以上訪れていることがわかった。

ここで、近代以降の都市計画によって、新たに整備され、現代において地域を代表する地点となっている①盛岡駅、②大通商店街、③官公庁街を取り上げる。そして、これらと同じ地域イメージを抱く範囲にどのような特徴が見られるのか把握する。図-6は、圏域図示法を用いた調査により得られた結果から、①駅前と同じ地域イメージ範囲、②商店街と同じ地域イメージ範囲、③官公庁街と同じ地域イメージ範囲の3つを示したものである。ただし、駅前には盛岡駅東口のバスターミナル、商店街は大通商店街、官公庁街は岩手県庁・盛岡市役所に着目し、これらを含んで描かれた地域イメージ範囲を面的にプロットした。対象者同士の回答の重複率は色の不透明度で表現し、対象者14名の回答が完全一致するエリアは100%、1人減少するごとに7%ずつ薄くなるように設定した。さらに、該当地

■ 性別		男性	女性	■ 年齢構成		20代	30代	40代	50代
		10 (71)	4 (29)			4 (29)	3 (21)	3 (21)	4 (29)
■ 居住地		盛岡市		岩手県 (盛岡市以外)					
		11 (76)		2 (14)					
■ 居住の有無		はい		■ 来街頻度		ほぼ毎日	2~3日に1回	1週間に1回	未回答
		1 (7)				3 (21)	2 (14)	5 (36)	
		いいえ				2週間に1回	1ヶ月に1回	未回答	
		13 (93)				2 (14)	1 (7)	1 (7)	

注) 単位は人、()内は%

域のエリア名称を、①何があるのか、②何をするのか、③何を感じるのかの3項目に分類し、その数と割合を表形式で示している。

図-6より、これらの境界部分には共通して、河川や段丘崖といった特徴的な自然地形が確認できる。盛岡駅は北上川、商店街は旧盛岡城の段丘崖、官公庁街は中津川や旧城郭の堀部分などがこれに当たる。また、駅や商店街、官公庁施設は地域を代表するシンボルであり、それぞれの地域イメージは独立して形成されていると言える。

(3) 地域イメージの歴史性と空間的特徴

近世期から城下町として栄えた地域であるため、その歴史性が地域イメージとして色濃く残る範囲はどこまで及ぶのか把握する。分析方法は前節と同様に、圏域図示法

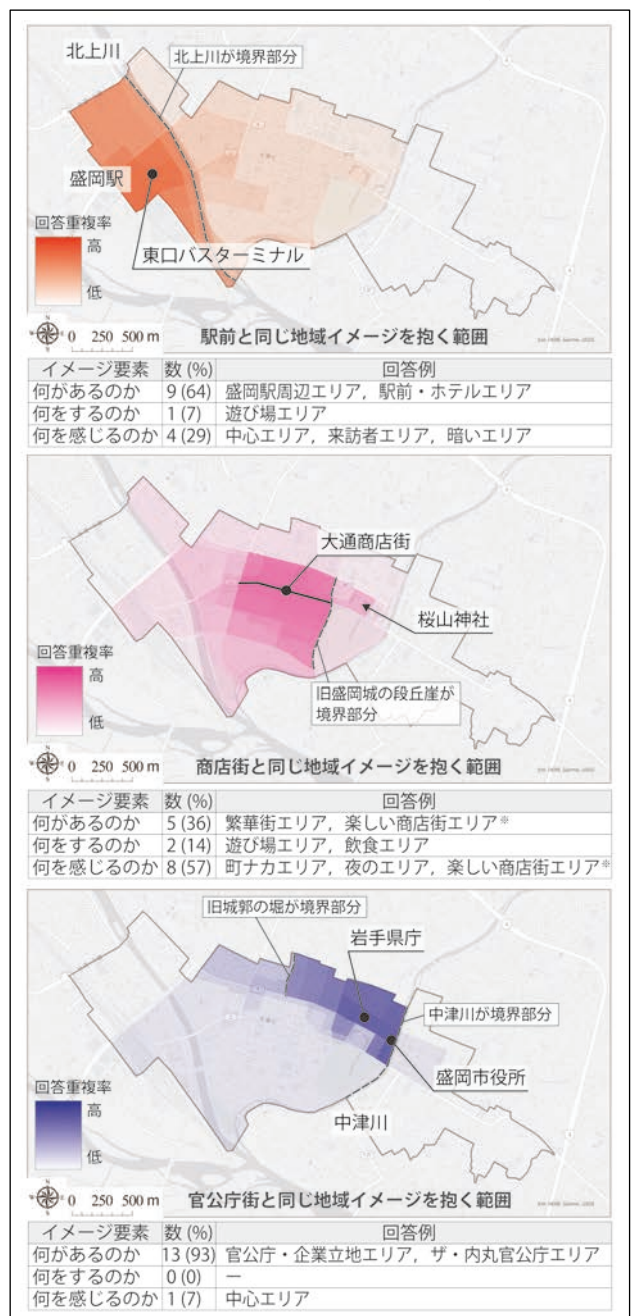


図-6 駅前・大通商店街・官公庁街の各地域イメージの範囲

を用いた調査結果を使用する。「昔ながらの街並みエリア」や「旧市街地エリア」など歴史性を意識したキーワードから名称が付けられている範囲、また盛岡城跡公園（旧盛岡城）を含んで描かれた範囲を面的にプロットした。そして、回答重複率に応じて不透明度を変化させた（図-7）。

図-7より、中津川の東側地域の全域に対して比較的均等に歴史性に関する地域イメージを抱いていることが読み取れる。一方で、近年再整備が進んでいることから「開発エリア」とする回答も見られた。このように、中津川の東側地域は、来街目的や土地利用形態よりも、その場所の歴史の深さが意識されていた。そして、この中津川を境に地域イメージの形成要因が異なっていると言え、近世の街並みや面影が残る地域では、歴史性に目を向けられる傾向がある一方で、地域住民に共有された明確なシンボルがある場合には、それらが影響して地域イメージが形成される可能性がある。

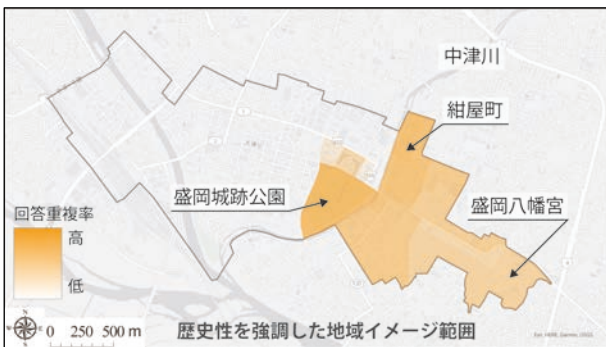


図-7 歴史的地域イメージの範囲

4. 都市形成史と地域イメージからみる地域らしさ

(1) 面的な都市整備事業と地域イメージ

本節では、2章で述べた「近代以降の面的な都市整備事業」「不整形街区の形成要因」と3章で述べた「駅・商店街・官公庁街・歴史性の地域イメージ範囲」の重ね合わせを行い、双方の関係性を分析・考察する。まず、これら空間的な広がり把握するため、「近代以降の都市整備事業、不整形街区の形成要因、各地域イメージの範囲」を図-8に整理した。その際、地域イメージの範囲は、それぞれ回答重複率が50~70%および70%を超える範囲として網掛けで表現してある。

図-8より、面的な都市整備事業の実施範囲と地域イメージ範囲の境界部分は、一致しない箇所が多いものの、それぞれに対応関係が見られる。その一方で、仁王地区土地区画整理事業のように、明確な地域イメージがないエリアも見られた。これは、再整備の主眼が何に置かれているのかという違いによるものであると考える。駅前地区で昭和53（1978）年から始まった市街地再開発事業では、東北新幹線の開通にあわせて大規模ビルを建設できるように再開が行われたという経緯がある³⁶。また大通商店街では、災害の防止に加え、環境の整備改善や土地の合理的利用の増進を目的に、防災建築街区造成事業が実施されている（昭和44（1969）年³⁷）。一方で、昭和34（1959）年に始まる仁王地区土地区画整理事業は、交通に困難をきたしていたことが背景にあり、幅員が狭小かつ不規則な街路を整えるべく、一部新道整備も行われた（都市計画

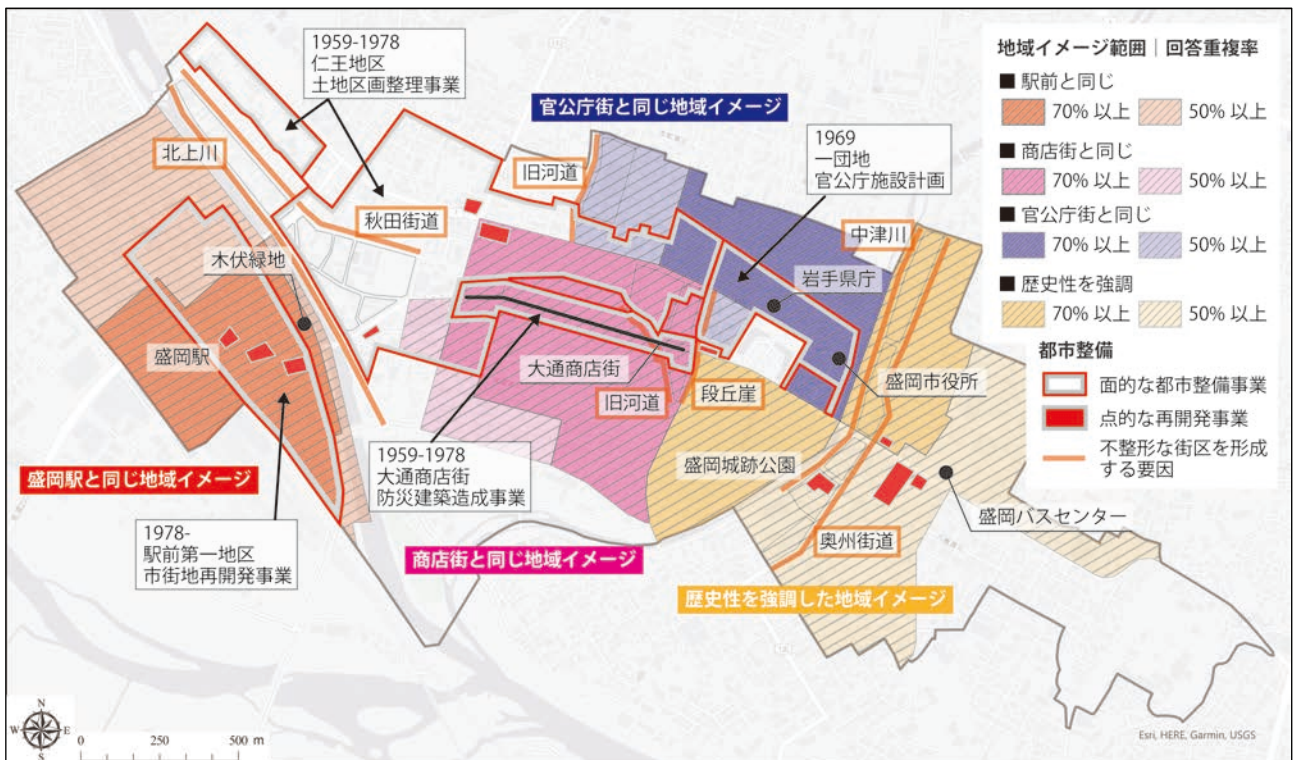


図-8 近代以降の都市整備事業再開事業と不整形街区の形成要因、および各イメージ範囲の関係

道路 向中野安倍線)³⁸⁾。このように、「対象街区の利用促進」が主眼となり面的整備が行われたエリアは、その範囲に対して地域イメージが対応する形で形成される傾向が見られるが、単に「都市空間の環境改善」を主眼とした面的整備の場合、地域イメージは形成されていない。また、明確な地域イメージが形成されない一つの要因として、点的に実施された再開発事業の影響が考えられる。この点的な再開発事業の分布状況を見ると、特定の地域に囚われず分布していることがわかる。そのため、整備前の土地利用形態とは異なる、新たな商業機能や滞留機能が、点的に付加される場合もあると推察される。そして整備により地域イメージやその範囲が変化し、エリアに対して抱く地域イメージが明確ではなくなったと考える。さらに、こうした面的・点的な都市整備が行われていった結果、都市機能が明確な面的エリアと、商業機能や滞留機能を有する場所が点的に存在するエリアとが、混在しているという空間的特徴を有している可能性がある。そこで次節では、駅から中心市街地を抜ける盛岡市中心市街地の代表的な街路（都市軸路線）において、都市形成と地域イメージの関係を分析・考察する。

(2) 盛岡市中心市街地の地域らしさ

まず本節で述べる「都市軸路線」は、都市間移動の拠点である盛岡駅から都市内移動の拠点である盛岡バスセンターとを結ぶ路線とする。図-9は、都市軸路線における①街路整備年代と②面的に行われた都市整備事業年代・点的に行われた再開発年代、③駅前・商店街・官公庁街と同様の地域イメージ範囲、④歴史性が強調された地域イメージ範囲を路線の北側・南側を分けて示している。また、横軸には路線の各箇所に代表的なシンボルを記載している。

それぞれの地域イメージの境界部分を見ると、官公庁施設や盛岡城跡公園の周辺区間を除き、南北の沿道空間ともに同様箇所で分節されており、地域イメージが明確なエリアと地域イメージが明確でないエリアとが、繰り返されていると読み取れる。ここで、開運橋—大通商店街区間に着目すると、南側沿道が北側沿道に比べ、商業系の地域イメージをより強く抱く傾向が見られた。これは、南側沿道空間に再開発ビルや商業施設が立地しているためと考えられ、こうした点的な整備により、路線内の沿道空間でも南北で違いが生じる場合があると推察される。中津川の東側地域でも平成に入ってから以降、沿道空間の点的な再開発が進み、歴史的な側面だけでなく、開発エリアとして新しい街という地域イメージを抱かれるようになった可能性がある。

盛岡市中心市街地は近世の城下町を基盤としているものの、駅前や商店街といった賑わいの中心部や現代の主要街路はこれらと異なるエリアに位置しているため、歴



図-9 都市軸路線の地域イメージの分布

史性に限らず複数の地域イメージが独立して形成されている。加えて、地域ごとに都市整備時期が異なり、その再整備の方法も面的・点的と多岐にわたる。そして、これは街の雰囲気や地域イメージがエリアごとに変化する特徴を有していると言い換えられ、盛岡市ならではの「地域らしさ」と言える可能性があると考えられる。

5. おわりに

(1) 結論

本研究では、盛岡市中心市街地を対象に、文献調査とアンケート調査から都市形成の過程と地域イメージを把握した。本研究で得られた成果は以下の通りである。

- ・ 自然地形や旧街道によって形成された近世期の不整形な街区は、都市形成の過程で現代まで部分的に継承されていることを明らかにした。
- ・ 地域イメージの境界部分が自然地形と重なる傾向があることを明らかにした。
- ・ 面的な都市整備事業の実施範囲と地域イメージ範囲を重ねることで、都市整備の主眼の違いにより、その実施範囲と地域イメージとの対応関係に差が見られ

ると指摘した。

- 盛岡市の空間的特徴として、都市機能が明確な面的エリアと、商業機能や滞留機能を有する場所が点的に存在するエリアとが、混在していることが挙げられると指摘した。

(2) 今後の課題

今後の課題は以下の通りである。

- 本研究でのアンケート調査から得られた地域イメージの範囲やその特徴を基に、日常的に地域を利用する住民を対象とした本調査を実施する。

謝辞

本研究のアンケート調査において、盛岡市役所の職員の方々には多大なご協力を頂いた。厚く謝意を表す。

参考文献

- 国土交通省：国土のグランドデザイン2050～対流促進型国土の形成～，2014，
<https://www.mlit.go.jp/common/001047113.pdf>，[最終閲覧日：2022.08.26]。
- 木下勇，ハンス ビンダー：日本の都市再開発におけるアイデンティティと持続可能性について，都市計画論文集，Vol.46，No.3，pp.463-468，2011。
- Yuhan Shao, Binyi Liu：Local Identity Regeneration of Unused Urban Spaces，International Review for Spatial Planning and Sustainable Development，Vol.6，No.4，pp.21-34，2018。
- 佐藤滋：城下町の近代都市づくり，鹿島出版会，1995。
- 佐藤滋：都心交通を支える骨格形態とまちの再生，国際交通安全学会誌，Vol.24，No.4，pp.230-239，1999。
- 盛岡市：中心市街地活性化 つながるまちづくりプラン，2021，
https://www.city.morioka.iwate.jp/_res/projects/default_project/_page/_001/022/624/plan_R3kai.pdf，[最終閲覧日：2022.08.27]。
- 西村幸夫：県都物語 47 都心空間の近代をあるく，有斐閣，pp.34-39，2018。
- 宋基伯，佐藤滋：地方中心・中小都市における中心市街地骨格構造との関連でみた中心市街地活性化事業の集積特性に関する研究，Vol.81，No.729，pp.2431-2441，2016。
- 松浦茂樹，島谷幸宏：我国城下町都市における水空間とその変遷，水利科学，Vol.30，No.1，pp.17-37，1986。
- 鶴添博士，佐藤滋：近世城下町を基盤とする地方都市の都市構造と人口変動との関連性，都市計画論文集，Vol.33，pp.385-390，1998。
- 対馬銀可，吉川徹，讃岐亮：駅との位置関係からみた地方都市中心市街地のにぎやかさを分析する手法の開発と適用，日本建築学会技術報告集，Vol.23，No.54，pp.667-670，2017。
- 角野幸博：地域イメージの構成要素に関する研究 大阪府南北地域を事例に，都市計画論文集，Vol.16，pp.373-378，1981。
- 清水浩志郎，木村一裕，木村宣幸，古山広功：「地方都市」に対する市民イメージの構造化について，都市計画論文集，Vol.22，pp.277-282，1987。
- 宇佐美卓，杉田早苗，土肥真人：来街者行動圏域と空間の選好から見た街の魅力の構造に関する研究，ランドスケープ研究，Vol.63，No.5，pp.809-814，1999。
- 木場佳音，杉田早苗，土肥真人：個人の大切な場所が織りなすまちの構造の研究 大岡山・千束地区を対象として，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.975-982，2021。
- 盛岡市土木部都市計画課：岩手県の都市計画 1996 人にやさしいまちづくりをめざして，1996。
- 国土地理院：地理院地図（衛星写真），
<https://maps.gsi.go.jp>，[最終閲覧日：2022.08.30]。
- 盛岡市史編纂委員会：盛岡市史 第三分冊一 近世期上，盛岡市役所，pp.7-8，1956。
- 細井計，伊藤博幸，菅野文夫，鈴木宏：岩手県の歴史，山川出版社，p.14，1999。
- 川井鶴亭，野原正勝：盛岡城下絵図。
- 森嘉兵衛：岩手近代百年史，熊谷印刷出版部，pp.249-250，1974。
- 盛岡市庶務部企画調査課 東北開発研究所：盛岡の歩み 市制施行 80 周年記念，盛岡市役所，p.70，1970。
- 前掲 22，pp.71-74。
- 大日本帝國陸地測量部：盛岡 [1927]，1927。
- 前掲 22，p.79。
- 前掲 22，pp.80-81。
- 前掲 22，p.83。
- 前掲 22，pp.81-82。
- 前掲 22，p.82。
- 前掲 22，pp.84-85。
- 前掲 20，p.79。
- 国土地理院：盛岡 [2013]，2013。
- 加藤章，高橋知己，藤井茂，八木光則：よくわかる盛岡の歴史，東京書籍，p.46，2016。
- 佐藤滋，城下町都市研究体：新版 図説 城下町都市，鹿島出版会，p.34，2015。
- 国土地理院：治水地形分類図，
<https://maps.gsi.go.jp>，[最終閲覧日：2022.08.30]。
- 独立行政法人都市再生機構 岩手・秋田開発事務所：盛南開発への道-盛岡新都市区画整理事業 事業誌，pp.10-16,28，2014。
- 前掲 22，pp.84-85。
- 前掲 22，pp.81-82。